OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「楽府菁華」における散齣の配列について
Author(s)	西尾, 俊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2006, 40, p. 45-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4197
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『楽府菁華』における散齣の配列について

西尾俊

『楽府菁華』巻一

多くの明清の戯曲選本において、収録されている散齣は、無秩序に並んでいるように見える。劉君錫編・万暦二八年（一六〇〇）刊『楽府菁華』（一九八四年台湾学生書局影印『善本戯曲叢刊』第一輯所収）もそんな戯曲選本の一つだが、良く観察してみると、編集者が意図を持って散齣を並べているように思える。

『楽府菁華』は全六巻で上下二層に分かれる。まず巻一の上層から見てみよう。最初は『四徳記』の「三元捷報」という散齣から始まる。『四徳記』は散逸したが、そのもととなった『馮京三元記』は、富裕な商人の馮商が四つの陰徳を積んだために息子・馮京を授かり、その馮京が郷試・会試・殿試を全て首席で合格する（即ち一人で解元・会元・状元の「三元」を兼ねる）物語である。「三元捷報」は、馮京が三元合格した知らせが届く様子を描く。簡単に言えば、〈科挙合格〉の場面である。めでたい内容であり、『楽府菁華』という書物の幕開けにふさわしい散齣と言えよう。

次に『香嚢記』の「兄弟叙別」、その次も『香嚢記』の「憶子平胡」という散齣が続く。『香嚢記』は、張九成が、母と妻を残して、弟の九思と共に科挙を受けに行き、九成は状元、九思は探花で合格する。しかし九成の答案が丞相の怒りに触れ、九成は契丹との戦いの場に送られる。そして、母から贈られた香嚢を戦場で失い、遂には契丹に囚われる。その後紆余曲折を経て、失った香嚢が鍵となり、最後に一家が再会する物語である。「兄弟叙別」は、科挙合格直後に、兄が戦場に派遣されるという、〈科挙合格後の別れ〉を描く。「憶子平胡」は夷狄と戦う息子を、親が心配する場面であり、〈親子離れ離れ〉の状況と言える。

四番目の散齣は『還帯記』の「香山還帯」である。『還帯記』は、香山寺で拾った帯を裴度が持ち主に返すと、持ち主はこの帯を賄賂に使って、自分の父を冤罪による死刑から救う。そしてこの善行の報いにより、裴度は科挙で状元となり、軍功もあげ、栄達する物語である。「香山還帯」は、裴度が香山寺で拾った帯を、翌日また香山寺に赴いて持ち主を探し、現れた持ち主に返す様子を描く。つまり裴度は〈親子再会につながる善行〉をするのである。

五番目の散齣は、再び『四徳記』から選ばれた「馮商還妾」である。「馮商還妾」は、子のいない馮商が一人の娘を妾として買ったが、身を売った経緯をその娘から聞くと、同情して娘を親元に送り返し、支払った代金もそのまま与えたという内容である。つまり馮商は、〈親子を再会させる善行〉をするのである。

最後は、『鸚鵡記』の「潘葛思妻」という散齣で締めくくられる。『鸚鵡記』は、妊娠している妃の蘇英を、王が皇后にすると、それを妬んだ妃の梅氏の奸計にはまり、蘇英は死を賜う。丞相の潘葛は妻に蘇英の身代わりを頼む。妻は自殺し、潘葛はその死体を焼いて検死をかわす。蘇英は身を隠す場所へ行く途中に子を産むが、追っ手が逼り、

子を置き去りにする。子は樵夫に拾い育てられ、十数年後偶然母子再会する。王が蘇英を殺したことを後悔した頃に、潘葛は真実を述べ、蘇英とその子が宮廷に戻る、という物語である。「潘葛思妻」は潘葛が、犠牲となってくれた妻を思い返す場面である。〈親子を救った後、その善行の犠牲になった女を思う〉のである。

以上で『楽府菁華』巻一上層の散齣を紹介し終えた。ここであらためて、〈 〉内にまとめた各散齣の要約だけを並べてみると、〈科挙合格〉〈科挙合格後の別れ〉〈親子離れ離れ〉〈親子再会につながる善行〉〈親子を再会させる善行〉〈親子を救った後、その善行の犠牲になった女を思う〉となる。このように見てみると、散齣はランダムに並んでいるのではなく、おおまかにストーリーを形成するように並んでいるのではないだろうか。編集者は、複数の物語から幾つか場面を抜き出し、それらを新たな一つの物語になるように並べている。詩の世界には「集句詩」というものがあるが、『楽府菁華』のこのケースは、極端に言えば「集齣劇」とでも呼べるものかもしれない。

続いて『楽府菁華』の巻一下層を見ていこう。まず『琵琶記』の散齣が五つ続く。説明の都合上、各散齣の題目の前に漢数字で並び順を示しておくと、一「伯喈長亭分別」、二「伯喈中秋賞月」、三「五娘剪髪送親」、四「伯喈上表辞官」、五「伯喈書館相逢」となる。

『琵琶記』の粗筋は以下の通りである。蔡伯喈は周囲から科挙を受けるよう逼られ、妻の趙五娘に両親を託して家を離れる（一「伯喈長亭分別」）。そして状元で及第し、官職を授けられ、丞相の娘婿となるよう逼られる。伯喈は結婚も官職も断り、帰郷を願い出るが、無理矢理言いなりにさせられる（四「伯喈上表辞官」）。その頃、故郷は飢饉に苦しむ。そして両親が亡くなると、五娘は髪を切り、それを売って埋葬のお金に充てようとする（三「五娘剪髪送親」）。一人となった五娘は、夫を捜しに都に上る。一方、伯喈は中秋に妻（丞相の娘）と月をめでるが、故

郷を思い、楽しめない（二「伯喈中秋賞月」）。そして遂に五娘が伯喈の住む丞相の屋敷を訪れ、書館で伯喈と再会する（五「伯喈書館相逢」）。

◇ 内に各散齣を要約すると、一「伯喈長亭分別」は〈男女の別れ〉、二「伯喈中秋賞月」は〈男は栄達〉、三「五娘剪髪送親」は〈女は困窮〉、四「伯喈上表辞官」は〈男は女のもとに帰れない（結果、女は男を怨む）〉、五「伯喈書館相逢」は〈男女再会〉となる。

その次に『西廂記』の「鶯鶯月夜聴琴」という散齣が置かれて、巻一下層は終わる。『西廂記』は、崔鶯鶯が賊に囲まれ、鶯鶯の母は、賊を退けた者に娘を嫁がせると宣言する。張君瑞は友人の将軍杜確に頼んで、賊を退治してもらう。しかし母は約束を破り、張と鶯鶯との結婚を許さない。鶯鶯の侍女の紅娘の助けで、張は「鳳求凰」を弾くなど、琴に託して恋心を鶯鶯に伝える。紅娘の活躍で、二人は思いを通わせ、更に科挙合格を条件に結婚が許される。張は合格するが、鶯鶯の婚約者が現れる。しかし再び杜確の助けで、遂に張は鶯鶯と結婚する物語である。「鶯鶯月夜聴琴」は、張君瑞が琴の曲に託して、想いを崔鶯鶯に伝える場面である。〈男が女に真情を伝える〉のである。

◇ 内の要約を初めから順に並べてみると、〈男女の別れ〉〈男は栄達〉〈女は困窮〉〈男は女のもとに帰れない（結果、女は男を怨む）〉〈男女再会〉〈男が女に真情を伝える〉、となり、最後の『西廂記』の散齣が、それまでの『琵琶記』の話に繋がり、一つのストーリーになっている。

なお、ここで気になるのは、大変有名な作品である『琵琶記』から採った散齣が、普通の『琵琶記』のテキストとは異なる順に並んでいることである。普通のテキストの順に並べ直すと、一「伯喈長亭分別」〈男女の別れ〉、四

「伯喈上表辞官」〈男は女のもとに帰れない（結果、女は男を怨む）〉、三「五娘剪髪送親」〈女は困窮〉、二「伯喈中秋賞月」〈男は栄達〉、五「伯喈書館相逢」〈男女再会〉となる。『楽府菁華』の並び順の方が、やや分かりやすいようにも感じる。偶々いい加減に並べた結果かもしれないが、編集者が意図的に並び替えた可能性もゼロではないだろう。

『楽府菁華』巻二

次に『楽府菁華』巻二の上層を見ていきたい。まず初めに『和戎記』の「冷宮自嘆」と題する散齣が来る。『和戎記』は、前漢の元帝が王昭君の噂を聞き、確認のため、毛延寿を使わして、その美貌を絵に描いて献上するよう命ずる。しかし昭君に賄賂を要求して拒否された延寿は、不吉な顔相を描き加える。その絵を見た元帝は激怒して、昭君を冷宮に入れる。しかし昭君の弾く琴の音を聞いて、昭君を見に行った元帝はその美貌に驚き、皇后にする。その後、昭君は沙陀に奪われ、その地で自殺する。元帝は夢で会った昭君の言葉に従い、昭君の妹を娶るという物語である。「冷宮自嘆」は、王昭君が冷宮で独り嘆く場面である。〈女は愛されず孤独〉である。

二番目に並んでいるのは『剔目記』（佚。『繡襦記』に似る）の「元和訪妓」である。『繡襦記』は、鄭元和が科挙受験のために都に上るが、妓女の李亜仙に一目惚れし、お金を使い果たし、騙されて亜仙とも別れさせられる。元和は乞食となる。亜仙は元和のことを思って客を取らない。ある日、亜仙の侍女が元和を見つけ、元和と亜仙は同棲する。亜仙が元和を励まして、元和は状元となり、二人が結婚する物語である。「元和訪妓」は、通りがかりに李亜仙を見て一目惚れした鄭元和が、翌日李亜仙のもとを訪れる場面である。〈男が女に惚れる〉場面である。

三番目の散齣は『五桂記』（佚）の「馮公子思憶」である。馮公子が、好きな女性の容姿を誉め、会いたい気持ちを唱い上げる。〈男は女に夢中〉である。

四番目は『金貂記』の「四老飲社」である。『金貂記』は、薛仁貴が、皇族の李道宗の悪事を上奏する。怨んだ道宗は謀反の罪をでっち上げて仁貴を獄に繋ぐ。この事に憤った尉遅恭は道宗の前歯を叩き落とす。皇帝の太宗は大いに怒り、恭を庶民の身分に落とす。遼軍が攻めてきた時、仁貴を派遣して遼軍に勝てば罪を許すことになったが、仁貴は敗れ、都に援軍を要請する。道宗の進言で、恭が老幼病弱の兵を率いて救援することになる。しかし、以前道宗の悪事で自殺した仙女の力を借り、遼軍を撃退する物語である。「四老飲社」は『金貂記』の現存完本に見当たらない場面ではあるが、四人の老人が村々の祭りの季節に集まって酒を飲み、平和な村々の様子を語り合う。春に耕したと思ったら、もう〈季節が過ぎて秋となった〉ので、時が過ぎるのは早いなあ、と唱う。そして、薛仁貴を助けに向かう尉遅恭の軍に参加しよう、と話の最後に少し付け加える、といった内容である。

巻二上層の最後は『躍鯉記』の「蘆林相会」である。『躍鯉記』は、姜詩が、老母、妻の龐三娘、子の安安と共に暮らす。隣家の寡婦が、三娘は姑の死を望んでいると、老母に讒言する。老母は病がちで、川の水を飲みたがるが、水神が邪魔をして三娘は水を汲めない。怒った老母は姜詩に逼り妻を離縁させる。三娘は蘆林で逢った姜詩に誤解であることを訴えるが、姜詩は復縁を拒む。老母は三娘からの贈り物で彼女の真心を知り、姜詩は自分で川の水を汲もうとして事実を知り、誤解は解け、一家団円する物語である。「蘆林相会」は、離婚させられた龐三娘が、夫だった姜詩と蘆林で会うが、姜詩に真情は伝わらず、復縁を拒まれる場面である。〈男は女を振る〉のである。

◇の部分だけを並べてみると、〈女は愛されず孤独〉〈男が女に惚れる〉〈男は女に夢中〉〈季節が過ぎて秋とな

った〉〈男は女を振る〉となり、今度もまた、一つのストーリーになっている。しかし、四番目の『金貂記』の「四老飲社」は、男女の話ではなく、ストーリーに合うように〈季節が過ぎて秋となった〉とまとめただけである。実際には、物語の本筋から離れた散齣である。

しかし、南戯や明清伝奇において、作品の合間に、ストーリーの展開に必ずしも必要ではない場面を挟むのは、観衆や読者を飽きさせないなどの理由で、むしろ良く有ることである。例えば、高禎臨『明伝奇戯劇情節研究』（文津出版社 二〇〇五年）は、「戯曲中的関鍵情節之運用」と「非関鍵情節之穿挿」の角度から『六十種曲』を分析した著作だが、この書の終わりの表に、『六十種曲』中の「非関鍵情節」、つまり物語の本筋にあまり関係のない齣（宴会や景色を長々と描写した齣など）が多数リストアップされている。従って「四老飲社」のような「非関鍵情節」が挿入されている『楽府菁華』巻二上層は、却って南戯や明清伝奇らしいと言えよう。

次に紹介する巻二下層にも、やはり同じように「非関鍵情節」、いわば余分な散齣が含まれている。巻二下層の初めは『投筆記』の散齣が「班超別母求名」、「姑媳金銭問卜」、「班超夷地中秋」と三つ続く。『投筆記』は、才能を持ちながら貧困の生活を送っていた班超が、功を立てるべく母や妻と別れて軍に身を投じ、西域に派遣される（「班超別母求名」）。残された母と妻は、貨幣を投げて超の安否を占う（「姑媳金銭問卜」）。その頃超は異域の王に見込まれ、婿にと逼られる。超は中秋の月を眺めて故郷を思い、結婚を固持する（「班超夷地中秋」）。その後超は西域諸国を平定し、超を敬愛する多くの地元の長老達から引き止められつつ帰郷する、という物語である。「班超別母求名」の場面は〈異域で功を立てるため、家族と別れる〉、「姑媳金銭問卜」の場面は〈残された家族は心配する〉、「班超夷地中秋」の場面は〈本人も故郷を思う〉、とそれぞれまとめられる。

四番目と五番目には『粧盒記』（即ち『金丸記』）の「陳琳粧盒匿主」と「劉后考鞫宮人」という散齣が続く。『金丸記』は、金の弾丸を発射して、それを拾った妃に太子が生まれると天官が予言する。皇帝が実際に行うと、李妃が金丸を拾う。やがて李妃が太子を生むが、李妃に嫉妬する劉皇后は、太子を橋から投げて溺死させるように寇承御に命じる。承御が太子を救おうと悩んでいると、陳琳が化粧箱を持って通りかかり、陳琳に頼んでその箱に隠して太子を宮中から脱出させた（「陳琳粧盒匿主」）。楚王に育てられた太子は、十年後皇帝の世継ぎに指名され、冠に金丸を付けて朝見する。劉皇后は承御を拷問し、陳琳を糾問する（「劉后考鞫宮人」）。皇帝は真実を知り、劉皇后を冷宮に落とし、李妃を皇后に立てる、という物語である。「陳琳粧盒匿主」は〈窮地を脱す〉、「劉后考鞫宮人」は〈窮地を救った者は責められる〉、とまとめる。

六番目に来るのは『紅葉記』（佚）の「韓氏四喜四愛」という散齣である。「韓氏四喜四愛」は、韓夫人が春の花鳥風月を一日満喫する華やかな場面である。これが先程述べた「余分な散齣」である。〈季節は春〉とまとめてみる。

最後の散齣はまた『投筆記』から選ばれた、「西域父老餞別」である。「西域父老餞別」は、西域諸国を平定した班超が、自分を敬愛してくれる多くの地元の長老達から引き止められつつ帰郷する、という場面である。〈故郷へ旅立つ〉と要約する。

◇の部分をまた初めから順に並べてみると、〈異域で功を立てるため、家族と別れる〉〈残された家族は心配する〉〈本人も故郷を思う〉〈窮地を脱す〉〈窮地を救った者は責められる〉〈季節は春〉〈故郷へ旅立つ〉、となる。やはり各散齣を繋げたストーリーにおいて、〈季節は春〉とまとめた「韓氏四喜四愛」は無くても良く、余分とも言

える。しかし南戯・伝奇的な作品構成には必要とも言える余分なのである。

『楽府菁華』巻三から巻六

以下、引き続き『楽府菁華』の巻三以降を紹介していく。各巻の各層ごとに、おおまかにではあるが、一つのストーリーを形成するように散齣が並べられていることが見て取れるだろう。◇ 内にはこれまで通り、各散齣の要約を記していくことにする。

巻三上層は以下の通り。最初の散齣は『躍鯉記』の「安安送米」。息子の安安は、誤解と奸計により離縁された母を思い、自分の食べる米を節約して、母に米を送る。〈孝行息子あり〉。二番目は『織絹記』(即ち『織錦記』。佚)の「槐陰分別」。天界の織女が、母の葬儀費のために身売りした董永に同情して、永の妻となって機を織り、身売りの代金を償う。永を救い終えた織女は、槐の陰で別れて天界に帰る。〈女は孝行息子を助け終えて別れる〉。三番目は『金貂記』の「桑園戯節」。皇族の男が田舎の美しい後家にちょっかいを出すが、女は拒否する。〈女はナンパなどには振り向かない〉のである。最後は『牡丹記』(即ち『観音魚籃記』)の「魚精戯真」。鯉の精が金牡丹という名の女に変身し、金牡丹の許婚の張真と親しくなろうとする。〈女はある男を好きになる〉。それでは、◇ の部分だけを初めから順番に並べてみると、〈孝行息子あり〉〈女は孝行息子を助け終えて別れる〉〈女はナンパなどには振り向かない〉〈女はある男を好きになる〉となる。

巻三下層は以下の通り。最初は『破窯記』の「蒙正破窯居止」。呂蒙正の妻は宰相の家の娘だが、呂蒙正夫妻はその家を追い出される。貧しくなった夫婦は、破れ窯を見付けてそこに住む。〈貧しい男女〉。二番目も『破窯記』

から「蒙正夫妻祭竈」。呂蒙正夫婦は飢えと寒さに困り果て、竈の神に神頼みをする。〈男女は貧窮にあえぐ〉。三番目も『破窯記』から「蒙正冒雪帰窯」。米を届けに来た妻の実家の侍女の足跡を見て、呂蒙正は妻の不貞を疑うが、すぐに疑いは晴れ、蒙正は科挙受験に出発する。最後には〈男は女を残して科挙を受けに行く〉。四番目も『破窯記』から「劉氏破窯聞捷」。呂蒙正が状元及第した知らせを妻が聞く。〈男の合格を女は伝え聞く〉。五番目は『洛陽記』(佚。『四美記』に似る)の「王氏取女回家」。夫が功名を求めて家を去ったまま帰ってこない。妻は実家の勧めにより、実家に帰る。〈男は女のもとに帰って来ない〉。六番目も『洛陽記』から「端明迎親訴情」(「端明」は北宋の蔡襄。蔡襄が端明殿学士だったことによる)。科挙に状元で及第した蔡襄は、家と都の間にあって、渡し船がよく転覆する福建省泉州の洛陽江に、橋を造るよう母から命じられる。〈女は息子に家路を整えさせる〉。最後は『憶情記』(未詳)の「妓女送別情郎」。妓女が男を長安へと送り出し、裏切らないでと男に頼む。〈男は遊女と別れて旅立つ〉。◇部分だけを並べると、〈貧しい男女〉〈男女は貧窮にあえぐ〉〈男は女を残して科挙を受けに行く〉〈男の合格を女は伝え聞く〉〈男は女のもとに帰って来ない〉〈女は息子に家路を整えさせる〉〈男は遊女と別れて旅立つ〉となる。

巻四上層は以下の通り。最初は『金印記』の「周氏粧台対鏡」。賢人を求める秦国に行った夫の蘇秦のことを、妻の周氏が鏡に向かって憶う。〈女は不在にしている男を憶う〉。二番目も『金印記』から「周氏問姆当釵」。周氏は夫の秦国への旅費を、自分の釵を売って用意したが、兄嫁の挿しているものがそれであることに気付く。〈女は男に尽くして貧しくなっていた〉。三番目は『玉簪記』の「秋江送別」。潘必正は科挙受験のため都に向けて舟に乗って出発するが、見送りに来た陳妙常とは言葉も交わせない。必正の母が去った後、妙常は小舟を雇って必正を追

い、妙常は必正に玉簪を、必正は妙常に鴛鴦の扇を送って泣いて別れる。〈男女の別れ〉。四番目は『目連記』の「尼姑下山求配」。尼が山を下りて異性を求めに行く。〈女は異性を求め出す〉。最後も『目連記』から「和尚戯尼姑」。山を下りた僧侶が尼をナンパする。〈女は異性から口説かれる〉。◇ 部分だけを並べると、〈女は不在にしている男を憶う〉〈女は男に尽くして貧しくなっていた〉〈男女の別れ〉〈女は異性を求め出す〉〈女は異性から口説かれる〉となる。

巻四下層は以下の通り。最初は『玉簪記』の「潘陳対操」。潘必正と陳妙常とが琴を弾き合って互いの恋心を伝え合う。一組の〈両想いの男女〉がいる。二番目は『荊釵記』の「玉蓮抱石投江」。銭玉蓮は継母に再婚を逼られ川に身投げする。〈男のことが好きな女は、貞節を守るため自殺を図る〉。三番目も『荊釵記』から「十朋母子相会」。都で王十朋母子は再会し、母は十朋に、十朋の妻の銭玉蓮が入水（実際にはその後助けられたが、母子はそれをまだ知らない）したことを告げる。〈男は女の自殺（未遂）を知る〉。四番目は『十義記』の「翠雲禁中訴冤」。韓朋の妻李翠雲は美しく、美女を集めていた反乱軍のリーダー黄巣は翠雲を奪おうとする。翠雲は自分の顔を傷つけるなどの抵抗をし、監獄に入れられ、獄中で思いを看守に訴える。〈女は体を張って貞節を守り続ける〉。最後も『十義記』から「昌国為友保孤」。韓朋の妻李翠雲が獄中で産んだ子を、韓朋の親友の李昌国が育てる。〈女の産んだ子を、男の親友が代わりに育てる〉。◇ 部分を並べると、〈両想いの男女〉〈男のことが好きな女は、貞節を守るため自殺を図る〉〈男は女の自殺（未遂）を知る〉〈女は体を張って貞節を守り続ける〉〈女の産んだ子を、男の親友が代わりに育てる〉となる。

巻五上層は以下の通り。最初は『四節記』（佚）の「東坡遊赤壁」。蘇軾と黄庭堅の二人は、江上に舟を浮かべ、

秋の赤壁に遊ぶ。これは宴や風景を描いた、ストーリー展開に必要のない散齣が冒頭に置かれたケースであろう。とりあえず〈季節は秋〉としておく。二番目は『護国記』の「真君点化陽明」。王陽明が漁翁（仙人）に出逢って、叛乱軍を平定する方法を教えてもらう。〈乱が起きている〉。三番目は『拝月亭記』の「世隆曠野奇逢」。契丹の侵入で都の人々は南に逃げる。そんな中、王夫人は娘を、蒋世隆は妹を見失う。世隆が妹の名を呼んでいると、その妹と名が似ている王夫人の娘が応答する。人違いに気付くが、娘は世隆に一緒に連れて行ってくれと頼み、夫婦ということにして同行する。〈乱の最中に男女が出逢う〉。最後は『胭脂記』の「遇柬伝情」。書生の郭華が、胭脂を売る店の王月英に恋をし、手紙で想いを伝える。〈男が女に告白する〉。◇部分を並べると、〈季節は秋〉〈乱が起きている〉〈乱の最中に男女が出逢う〉〈男が女に告白する〉となる。

巻五下層は以下の通り。最初は『箱環記』（即ち『鑲環記』。佚）の「張氏売環奉姑」。藺相如は功名を求めて家を去り、妻は箱環を売って一家を養う。〈男は家族を残して功名を求めに行く〉。二番目も『箱環記』から「廉頗相如争功」。趙の宰相藺相如と趙の名将廉頗が論争し、藺相如は自らが知恵だけではなく、武人にも負けない勇気を備えていることを主張する。〈男は宰相〉。三番目は『商輅三元記』の「秦雪梅観画」。秦雪梅が四季を描いた絵を見て回る。それぞれの絵にはまた、昔の有名人物が描かれている。その中で婚約者の商霖が書いた題画詩を見て興味を持ち、婚約者に会いたいと思う。この散齣は四壁の絵の描写が中心で、物語の本筋に関係ない余分な散齣と言えよう。〈女は男に会いたくなる〉。最後も『商輅三元記』から「秦氏断機教子」。秦雪梅は、亡くなった婚約者商霖とその妾との間の子・商輅を育てるが、ある日、輅が勉学を怠るのを叱責して打つ。輅の祖父母は孫をかばうが、雪梅は鉈で織機を断つ。それを見て祖父母は謝り、輅は恐れて勉強する。〈女は息子に勉強させる〉。◇部分を並

べると、〈男は家族を残して功名を求めに行く〉〈男は宰相〉〈女は男に会いたくなる〉〈女は息子に勉強させる〉となる。

巻六上層は以下の通り。最初は『鳴鳳記』の「楊継盛修本」。陰謀により左遷されていた楊継盛が、陰謀がばれて復活する。死を恐れず、政界の悪の中心人物の罪を連夜書き連ねる。〈男は奸臣を追い出そうとする〉。二番目も『鳴鳳記』から「鄒孫表勅厳崇」。鄒応竜と孫丕揚とが上奏して、奸臣たちを追い出す聖旨を得る。〈男は奸臣を追い出す〉。三番目は戯曲名未詳の「百花評品」。女達が美しい花々を数え上げ、中でも牡丹が最も素晴らしいと唱う。〈女は花々を品評する〉。四番目も戯曲名未詳の「玉娘月夜憶夫」。玉娘という女が月夜に、半年家を不在にしている夫を憶う。〈女は不在の男を憶う〉。五番目も戯曲名未詳の「亜仙鶯鶯争能」。『練襦記』の李亜仙と『西廂記』の崔鶯鶯とが、男を立派にする能力の優劣を夢の中で言い争う。〈女は賢妻ぶりを争う〉。六番目も戯曲名未詳だが、散佚した『桃園記』の一部とも思われる「魯粛求謀」。三国呉の名将魯粛は蜀の名将関羽攻略の策を探す。〈男は武力で争う〉。七番目も戯曲名未詳の「思憶美人」。夕方から夜にかけて、男が理想の女に出逢うことを独り夢見る。〈男は理想の女を夢想する〉。最後も戯曲名未詳の「遊女題情」。春に妓女が、若い時期を無駄にするなと唱って、男と飲み遊ぶ。〈女は男と楽しく遊ぶ〉。◇部分を並べると、〈男は奸臣を追い出そうとする〉〈男は奸臣を追い出す〉〈女は花々を品評する〉〈女は不在の男を憶う〉〈女は賢妻ぶりを競う〉〈男は武力を競う〉〈男は理想の女を夢想する〉〈女は男と楽しく遊ぶ〉となる。男女の対比の物語になっている。

巻六下層は以下の通り。最初は『断髪記』の「淑英冒雪逃回」。夫が死んだとの知らせ（実は誤報）により、再婚を逼られた裴淑英は、雪を冒して夫の妹の李玉卿と共に逃げ出し、髪を切って絶食する。〈女は貞節〉。二番目は

『青衫記』の「禹錫郊外遊賞」。劉禹錫が名妓裴興娘の家で宴を催し、元稹と白居易が入仕したことを祝う。白居易は、外に出て青衫を脱いだ拍子に酒をこぼしてしまい、青衫を質に入れて酒を買い補う。興娘は白と同宿し、元と劉は帰る。〈男女同宿〉。三番目も『青衫記』から「裴興娘還青衫」。乱が起こり、裴興娘は青衫を買い戻してから逃げる。偶々白居易の故郷に至り、白居易の家に泊めてもらった宿賃の代わりに、白居易の青衫を贈ると、受け取った侍妾に驚かれる。〈女は男のことが気になる〉。四番目は『金印記』（即ち『双卿記』。佚）の「華国文中式赴宴」。華国文は科挙に合格し、合格者の宴に赴く。ここも、宴や風景を描いた、物語の本筋に関係ない散齣を挟んだケースだろう。〈男は科挙合格〉。五番目も『金印記』から「華国文修書伝情」。下女の蘭香は仕えている女の命で、蘭の花を華国文に送り届け、華国文は手紙を蘭香に持たせて女に想いを伝える。〈男女は両想い〉。六番目は『鸚鵡記』の「潘葛筵中思妻」。潘葛は宴の最中に、蘇后を助けるために身代わりに死んだ妻の李氏を思う。〈男は亡くなった女を思う〉。七番目は『萃盤記』（即ち『晬盤記』。佚）の「二状元加官進禄」。竇儀兄弟は文武の状元となり、辺地に出征して軍功を立て、辺地を統べる職を授かる。辺地の州官は、礼物を贈り、歌妓をそろえて祝宴を開く。〈男は出世する〉。最後も『萃盤記』から「竇禹鈞五喜臨門」。竇禹鈞の五人の息子が皆、文武の科挙に合格したことを喜ぶ。〈息子らは科挙合格〉。◇部分を並べると、〈女は貞節〉〈男女同宿〉〈女は男のことが気になる〉〈男は科挙合格〉〈男女は両想い〉〈男は亡くなった女を思う〉〈男は出世する〉〈息子らは科挙合格〉となる。

『楽府菁華』

これまでは各巻の各層ごとに見てきたが、『楽府菁華』という書物全体を見渡した場合にも、散齣の配列に編集

者の意図を感じる。巻一上層の最後の散齣『鸚鵡記』「潘葛思妻」と、巻六下層の六番目の散齣『鸚鵡記』「潘葛筵中思妻」とは、齣の題目は多少異なるが、本文はほぼ全く同じものである。全く同じ散齣が始めと終わりに出て来るのである。散齣の内容は、死を命じられた皇后蘇英の身代わりとして死んでくれた自分の妻のことを、潘葛が思い返すというものである。巻一上層はこの散齣で終わりとなる。女は死んで、男に思い出されるだけである。しかし巻六下層ではこの後に、『萃盤記』の「二状元加官進禄」と「寶禹鈞五喜臨門」という散齣が加わる。「二状元加官進禄」では、寶儀兄弟が文武の状元となって官職を授かり、「寶禹鈞五喜臨門」では、寶禹鈞が息子五人の科挙合格を喜ぶ。巻六下層では女が死んだ後、男や息子たちは出世するのである。最初の巻では女が犠牲となって死ぬだけだが、最後の巻では同じく女が犠牲となって死ぬが、残された男や息子たちが立派に出世して『楽府菁華』は幕を閉じる。

『楽府菁華』という書物は、終始読み物としての工夫を凝らした戯曲選本と言えよう。

（大学院博士後期課程）

摘要

関于在《楽府菁華》中散齣的排列問題

西尾　俊

在大多数的明清戯曲選本中所収録的散齣，看起来好象都是被無秩序地排列着的。可是劉君錫編輯的万暦二十八年（1600）刊《楽府菁華》，我認為是編者有意図地将散齣排列出来的。

《楽府菁華》総計六巻，毎巻又分成上下両段。従複数的戯曲中選出的散齣，是按着使各巻的各段形成各自独立的一個故事的順序而被排列起来的。

同時，従《楽府菁華》的整体来看，散齣的排列也都是開始和結束前後相呼応。巻一上段中起着悲惨結局作用的散齣，在巻六下段里再次登場。在巻六下段中，其後又另外加了両個散齣，使結尾成為美満的大結局。由此可見，這是編者有意図排列的結果。

キーワード：『楽府菁華』，戯曲選本，散齣，南戯，明清伝奇